

医薬連携から得た情報を十分活用するために～保険薬局における取り組み～

本田雅志 そうごう薬局 天神中央店

近年、がん薬物治療は外来通院にて施行されるケースが増加している。保険薬局においてもがん患者に接する機会は増加しており、患者・家族の要望に応じた切れ目のないがん治療の提供を行うためには医療機関と保険薬局の連携が必要である。そうごう薬局天神中央店（以下当薬局）も応需先との連携強化により、現在では院内採用のレジメン情報の公開や、薬薬連携研修会の開催、副作用への対処法の共有などがされるようになった。

連携で得た情報を十分に活用し、がん患者の最適な治療の継続を支援することを目的に、当薬局では①疾患別薬剤師担当制（以下担当制）の実施、②日本臨床腫瘍薬学会認定の外来がん治療認定薬剤師（以下 APACC）の取得、③外来がん薬物治療患者における保険薬局クリニカルパス（以下パス）の開発などの取り組みを行った。①担当制の実施では、一人のがん患者に対してがん領域を専門とする薬剤師一人が基本的に毎回対応することで、「いつも決まった薬剤師で安心できる」という患者との信頼関係の構築と「この患者は自分が担当する」という薬剤師の責任感の醸成ができた。②APACC の取得によりがん治療に対する専門性を担保されたことで、がん患者への対応をより自信をもって行えるようになり、また上記の担当制とあわせて、医療機関からも情報提供の窓口として認識されるようになった。③パスの開発では、薬剤師ごと、対応ごとにバラつきがあった対応内容について、がん患者支援手順を定め、その手順にあわせたツールを各種作成、運用した。それにより、がん患者対応の標準化ができ、介入をより多く行えるようになった。

外来がん薬物治療患者ケアの更なる向上のために、医療機関と保険薬局の連携は今後も進むことが予想される。連携により得た情報を十分にごん患者に還元するために、保険薬局の薬剤師も知識やスキルの向上、適切な対応手順の検討などを主体的に行っていく必要があると考えられる。